

第3回恵那南地区中学校あり方検討委員会

日時：平成26年8月26日(火) 19時30分～

場所：岩村振興事務所 大会議室

1. あいさつ（委員長・教育長）

2. 報告事項

*委員の追加承認について

*「恵那南地区中学校あり方検討委員会だより」について

*現地視察を通しての感想について

3. 恵那市の中学校の適正規模のあり方について

*「小規模教育検討委員会報告書」(H21/12) より

*恵那南地区中学校の現状

4. 各地域毎でのワーキング

テーマ「地域や時代のニーズに応える学校づくり」

～小規模教育検討委員会の検討結果を踏まえて～

・岩村町

・山岡町

・明智町

・串原

・上矢作町

5. その他

次回開催 9月29日(月) 19:30～予定

平成26年度恵那南地区中学校あり方検討委員会委員名簿

区分	役職名等	氏名	備考
小中学校代表	岩邑小学校長	足立 篤美	
	山岡中学校長	丸山 優	
地域協議会代表	岩村地域協議会副会長	勝川 哲男	
	山岡地域協議会長	大庭 勝徳	
	明智地域協議会長	阿部 道長	
	串原地域協議会委員	三宅 勝継	
	上矢作地域協議会長	鈴木 峰夫	委員長
自治連合会代表	岩村町自治連合会長	西尾 公男	
	山岡町自治連合会長	西尾 忠昭	
	明智町自治連合会長	中根 貞好	副委員長
	串原第3区自治会長	大嶋 和司	
	上矢作町自治連合会長	山内 忠良	
中学校PTA代表	岩邑中PTA副会長	榎本 錦也	
	山岡中PTA会長	成瀬 和男	
	明智中PTA会長	成瀬 功一	
	串原小中PTA会長	大島 成通	
	上矢作中PTA副会長	田之上 和代	
小学校PTA代表	岩邑小PTA会長	吉村 政則	
	山岡小PTA会長	山本 浩嗣	
	明智小PTA会長	大内 鉄平	
	串原小中PTA副会長	齊藤 賢志	
	上矢作小PTA会長	堀 靖広	
保育園保護者会代表	岩村保育園保護者会長	山本 純	
	山岡保育園保護者会長	小木曾 守	
	明智保育園保護者会長	丹羽 英樹	
	吉田保育園保護者会長	澤野 繁紀	
	串原保育園保護者会長	中垣 野歩	
	上矢作保育園保護者会長	大島 孝介	
事務局	学校再編対策室長	勝川 甲子	
	学校再編対策室次長	水野 教正	
	学校再編対策室主任主査	市川 新祐	
	学校再編対策室主任主査	西尾 克子	
	学校再編対策室係長	梅村 浩三	
	学校再編対策室主査	市川 篤励	
	学校再編対策室主査	山田 耕司	
教育委員会	教育長	大畑 雅幸	
	教育次長	小林 規男	
	教育次長	伊藤 勝彦	
振興事務所	岩村振興事務所長	西尾 茂文	
	山岡振興事務所長	小木曾 正英	
	明智振興事務所長	門野 幸次朗	
	串原振興事務所長	三宅 勝彦	
	上矢作振興事務所長	熊谷 浩	

第 1 号 恵那南地区中学校あり方検討委員会だより

http://www.city.ena.lg.jp/shisei/administration/committee/enaminami_arikata/

平成26年8月1日発行
恵那市教育委員会 学校再編対策室発行

《ここまでの流れ》

恵那市の小中学校は、幼年人口減に伴う児童生徒の減少により、小規模化が進むとともに複式学級を余儀なくされる学校が増加する傾向にあります。これは平成18年度からの「恵那市総合計画」に『学校の小規模化に対応する教育のあり方』として位置付けられ、平成21年12月に「小規模教育検討委員会からの報告書」としてまとめられました。その報告を受け、平成26年度から恵那南地区（岩村・山岡・明智・串原・上矢作）の中学校のあり方を検討するために恵那南地区中学校あり方検討委員会を設置しました。

第1回は6月6日（金）に岩村振興事務所で開催しました。第2回は、7月15日（火）に市内中学校の様子を視察しました。この「たより」は、あり方検討委員会の動きをみなさんに広くお知らせしていくものです。

第1回あり方検討委員会

◇議題

開会のあいさつ

委員委嘱

議事

- 1 委員会設置要綱（案）について
- 2 正副委員長の選任について
- 3 これまでの取組について
- 4 年間スケジュールについて
- 5 その他

◇第1回の概要について

小中学校代表を始めとした恵那南地区の自治連合会・地域協議会・保育園保護者会・小中学校PTA代表と事務局等を含めた合計38名の構成メンバーで発足しました。

意見交換の中では『統合による子どもたちへの影響』に関する意見が多く挙げられました。



【第1回あり方検討委員会の様子】

（第3回開催8月26日（火）午後7時30分～
岩村振興事務所 2階大会議室）

第2回あり方検討委員会

◇内容

委員による現地視察の実施

- 1 串原小中学校視察
- 2 恵那西中学校視察
- 3 上矢作中学校視察

◇第2回の概要について

委員による市内3校の視察を行いました。ここでは、複式学級を開設している小学校の授業も参観しました。2つの学年を1つの教室とする『複式学級』については、本委員会の重要課題とする部分であり、質疑応答においては多くの意見が出されました。



【現地視察の様子】

◇委員の方の感想から

3校を視察したが、小規模校では「相手を思いやる気持ちは強い」と思うので良いことだと思います。ただ、保育園から中学校までクラス替えが無く、家族同様な雰囲気で学校生活を送るので、馴れ合いで競争意識が無いように感じた。

普通規模校では、学校自体の活気を感じました。生徒自身にも活気を感じました。

どの学校の先生も一生懸命に生徒の能力を引き出す工夫をしておられました。

現地視察（7月15日）を通して感じたこと

【串原小中学校】

- ①極小規模校は、塾的授業であって学校教育は難しさが沢山ある。
- ②生徒が少ないのでそう思えたかもしれませんが、全体的におとなしい感じがした。また、授業の様子を見てみると、元気で活発な感じが見受けられなかったように思います。（「はき」がないように思えました。）そのため、先生は授業の様子から察して、生徒をどのように導いていくか、苦勞しておられるようでした。確かに、生徒が1クラス40人程度であってもそれなりに苦勞して見えると思いますが、違った意味でのご苦勞があると感じた。
- ③小中合わせて42名の小規模校で、教師と生徒との間が非常に近く、家族的な環境の中で行われている感がありますが、少人数のため大きな団体の中での行動・集団競技等の実施の困難さを感じた。
- ④山深い環境の中ですがすがしい空気を吸い込んで生徒それぞれがのびのびとしている様子の反面、閉ざされたもう一つの環境が「井の中の蛙」といった印象が残り、生徒同士が互いを励ますというより気遣い合って、本当にやりたい自身を出し切れてないように感じました。先生や授業内容についてもゆったりした空間で行われていて、覇気を感じられませんでした。統合（仮定）する前にもっと他校との交流会のような会をどんどん増やしてあげられたらと思いました。
- ⑤児童数が極端に少ないため、複式学級形式を取っているが、授業と言うよりは塾で勉強している感じがした。児童が多ければ子どもたちどうして色々な話をしたりスポーツができると思うので、やっぱり小中学校卒業するまで周りが変わらないので、地域性が強くなってしまい、大人になってから大きな会社に入社しても協調できないかもしれない。
- ⑥生徒たちが非常におとなしい。一人一人に目が届くという点では、良い環境ではあるが、集団での教育はむずかしい。先生方は中大規模校とのハンディを痛切に感じておられるようで、色々努力、工夫をされている様子がよくわかる。
- ⑧学校は家庭では子どもを育てる上で、できないことを実現でき得るところでなければならぬと思う。小さな学校では、家庭の延長線上であって、学校でなければ体験できないことができない気がします。
- ⑨教職の先生方に支えられ一生懸命勉強する子どもたちの姿勢が伺えた。
- ⑩少人数でできないことがあります。皆で仲良く活発にしていたのが印象深かったです。先生（校長先生）も素直だと言っておられました。ただ、中学校では本当に少人数なのでちょっとさみしいかと思いました。
- ⑪先生の目が届くことは確かだと思うが、机が2つだけの教室は、何とも異様な感じが有り、この子たちが都会に出た時、かなり苦勞するだろうと思う。

⑫ 1 学年 3～4 人のクラスで行う授業は、生徒も先生もお互いに真剣勝負でないと続けられない気がした。串原の人々が学校教育に期待する地域の子どもを育てるということ、教職員は受け止めて対応している気がする。小学校の複式学級は、先生・生徒どちらにとっても負担が大きく、学習の成果はあがりにくいと思うがどうなんだろう？

【恵那西中学校】

① 普通規模校は、今は何も無い（多少の問題はあるとのこと）が、数年前の荒れた時代は再来する危険性はあるという前提で、生徒・保護者との対応を考慮しておくことが必要と感じた。

② 3 年生の音楽の授業を見させてもらいましたが、教える先生もそうでしたが、生徒たちも生き生きとした行動には圧倒されました。1・2 年生の授業も大変活発に見えました。本来はこのような姿が正常なのかもしれません。先生も生徒が多ければそれなりに苦労があると思いますが、先生自身がやりがいがあるのではないのでしょうか。授業を見ていてそのように感じました。視察後に玄関に向かうと生徒たちが清掃活動を行っていましたが、元気な声があちらこちらから聞こえてきて挨拶もしっかり出来ていたと思います。本来の学校の姿に出会ったように感じた。

③ 1 クラス 40 数名の生徒 1 人 1 人に対して、先生の目が平等に届くか気になりましたが、授業に対する生徒の姿は良かったと思いました。また、部活動数も多く選択でき良いと思いました。

④ 過去の統合による当時の話も少しありましたが、現在は落ち着き、校風や校訓を生徒やとりまく親さんにも徹底して伝えている様子は統一性を強く感じました。特に合唱祭を通して発表する生徒の姿は、それぞれのパートをこなし混声四部合唱の声の調和性を完成しようとする所など感銘を受けました。授業風景については、各々生徒自身がしっかりした姿勢で望まないと言われたいわゆる様な集団も生まれそうな感じがしました。先生同士の縦のつながりは徹底されているように思いました。

⑤ 大勢生徒がいると少数の中学校にはないクラス替えができるし、運動会ではクラス対抗ができるので競争心が高まり学校生活が充実している感じがした。大勢いたら問題も多く出ると思うが、それも大人になってから良い思い出になるでしょう。

⑥ 生徒たち一人一人が元気で活発である。先生方も沢山の生徒を指導することで、気配りなど工夫が感じられる。授業の雰囲気も活発であり大変良い。

⑧ 日常的な学習を見せていただきました。先生も生き生きとして生徒と接して、充分その力を発揮してみえる気がしました。教育を語る時、やはりその生徒の育つ環境を私たち周囲の者が考えていく事が大切だと感じました。

⑨ 中学校としてあるべく姿（状態）と思った。多勢の数があれば若干の悪は必要とも思われる。そこから発生する様々な問題が、子どもたちの成長を育む人間模様が団体生活

の中で生まれてくる。(給食は大変おいしかったです。)

⑩生徒が多いのでワイワイガヤガヤしていました。先生たちもアットホームな感じでは無く、僕の印象では高校な感じがしました。生徒はのびのびやっている感じでした。コーラスは良かったです。

⑪授業参観であるため、全員が真剣に取り組んでいたが、普段はもっと目を盗んで色々問題を起こしていると思う。私もそうであったが、それもまた懐かしい思い出となっている。

⑫生徒の数が多く活気を感じたが、中には元気な子もふさいでいる子もいてそれは確率の問題と思う。見学した音楽の合唱は、目が潤むほど良かった。合唱は人数が多いほど良くなると思うけど、それは小人数では味わえないと思う。教員の数が多く、部活動もたくさんできることは、生徒の選択肢を広げることになり良いことと思う。

⑬標準規模学校は大きいと感じましたが、学校運営(経営)や教育内容については、素人にとっては、短時間の視察であり全くわかりませんでした。

【上矢作中学校】

①小規模校として良い面が多く見られた。クラブ活動の困難の実態が日頃の放課後の活動の映像等で見られると良かったかなと思った。

②この学校の生徒は小人数ながら、割合に元気が良く活発に感じた。先生も生徒には自然に接していて授業の雰囲気は良かったと思う。1年生が不在なのでわからなかった。やはり、小人数ということで大人数のクラスの先生とは違った苦労が見受けられた。串原小中学校と同じで、保育園から中学校まで同じメンバーなので、和気藹々の感じがした。

③1学年12～13名の編成の中で生徒1人1人に対して、先生の目が良く届くとは思いますが。部活動の面において、団体競技等ができず、選択のできない点が気になります。

④小規模ながら生徒の様子については、それぞれ覇気も感じられる部分がありました。同学年単学級で仲良く進められているが、クラス編成替えができないために考え方の一新性はなく固定されてしまっている感じがしました。串原小中学校程ではないが、部活動のチーム編成や単独チームそのものも成り立たないので、学校内での試合もできないで、勝負のあり方がわかりづらい様に感じました。この地域は交通の便が悪く、仮に岩村方面と寄り合うにも距離感が遠いと感じました。

⑤生徒数は串原より多く、授業では色々意見が飛び交っていたので生徒数でいったら、この人数が最低ラインかもしれない。しかし、クラス替えがないのでは、周りが変化しないので、向上心が薄れてくるのではと思う。

⑥生徒は全体におとなしい。小規模校では育たない部分を明確にして、学校全体が努力している姿がよくわかる。授業も指導の方向性がしっかりしていてわかりやすい。

⑧小さな学校では、人間が小さくなってしまう気がします。今回のこの機会をとらえて

普通規模の学校で学ばせてやりたいと思いました。

⑨串原と同感。クラブ活動を希望しても、数の不足に不満を不満と思わなくなる事の子どもたちの気持ちと、その進路にも別の危惧を心配します。

⑩僕の感想としては、このくらいの人数だとちょうど良い様な気がしました。先生との距離もちょうど良いかと思いました。地元かもしれませんが・・・。

⑪先生と生徒の双方向の授業ができて理想的にみえた。しかし、中学生が本当に授業について行けるとは思えない。

⑫校長先生が良い意味の競争がないという意味のことを言われたが、全くそうだと思う。この人数では、頑張っても順位をあげるのは大変で、小中学校での順位は、地元では将来にわたって固定されたものになることがあり、本人の可能性を伸ばす妨げになるかもしれない。

⑬学校評議員をしており、何回か子どもたちに触れることもあり、若干は分かっているつもりです。平成25年度まで、まちづくり委員会活動でも子どもたちの活動に触れてきました。また、授業参観の様子などでも、子どもたちが「だめだなー」と感じた事はありませんでした。

【全体】

① 平日にかかわらず、父母の方の参加が多く、問題に対する関心が高いことがわかった。

② 3校を視察したが、串原小中学校・上矢作中学校共、保育園から中学校までクラス替えがなく、家族同然な雰囲気です。学校生活を送るので、馴れ合いで競争意識、悪くいえば敵対心が無いように感じた。確かに、相手を思いやる気持ちは強いと思いますので、良いことだと思います。その点、恵那西中学校は学校自体にも活気があり、生徒自身も活発で活気に満ちあふれている感じを受けた。どの学校の先生も一生懸命に、生徒の能力を引き出す工夫をして教えておられると感じた。

③ 小規模校、中規模校の学校それぞれのメリット・デメリットは感じますが、社会に出る前の大切な時期でもあり、集団行動及び競争力を高めるためにも、ある程度の規模の中での教育を受ける環境が望ましく思われます。

④ 特に、人口減の串原・上矢作地域については、可能な限り地域の方の意見を反映した形の新しい場所への統合校舎になったら理想だと思いました。生徒自身の競争心、調和等幅広い視野で勉強し、部活動がすすめられたら、やがて高校に進学するにあたって、社会性に少しでも早く受け入れるのではないかと思います。新校舎（仮）の建設には道路整備や時間配分、さまざまな問題が浮上し、困難を極めることは違いないが、確実に来たる少子化の学舎を自然にまかせ放っておいては、何の前進もなく衰退は余儀なくされます。身近な意見から話し合いの場を地域の親さんにも参加頂ける会が欲しいと思いました。

- ⑤児童が少ない小中学校を初めて視察しました。児童減少で子どもたちの社会性を身につけさせるのは難しくなっているのが理解できたので、クラス替えできるくらいの規模が、望ましい教育水準を維持できる範囲だと思いました。
- ⑥全体的に感じることは、訪問した3校があまりにも違いすぎる。同じ恵那市に住んでいて、同じ年齢の子どもたちがここまで違う教育を受けることはやはり問題である。
- ⑦授業を見学しましたが、生徒間での質疑ができることが大事であり、学習に対しての基本であるのではないかと。多数生徒の授業は、先生の指導力が大きいと思います。生徒の個性を発見することが重要であり、教育の向上になると考えます。
- ⑧地域にとって学校の再編は、生涯のうちでそんなに機会のあるものではない。この度、恵那市合併に伴って恵南統一の中学校という機会ができました。これは、子どもたちだけでなく大人にとっても未来の恵那市・恵南地域の発展にとっても、非常に良い機会であると考えます。学校の統合は、地域の意志の統合につながっていくと思います。難しいですが皆で知恵を出していきたい。
- ⑨恵南地域の中学校の統合には、その地域各々の考えや思いがあります。子どもの将来像を描き、課題を抽出しながら時間を掛けても、統合に向けての働き掛けが真に地域としてその任務が大切、必要不可欠と思います。
- ⑩全体だと、串原では少ない気がしますが、恵那西中だと少し多い様な気がしました。1クラス20人くらいが丁度良いかな？と思いました。
- ⑪中学生の教育がどうあるべきか、そんな大きな問題の答えを出す事はできません。でも、大人の都合で子供等が犠牲になることだけは避けたいと思います。
- ⑫小人数の学校と標準的な学校を比較すると、教育の質や子どもの選択肢の多さを考えると、標準的な人数（合併）がいいと思う。その際に考えるのは、通学時間を短くすることと思う。また、将来恵那市を背負って立つ人材を育てるには、地域の体験をすることが必要になると思う。学校教育とは別次元の問題かもしれないが、その点の配慮は恵那市の未来を左右すると思います。
- ⑬繰り返しになりますが、短時間でその組織（学校）の状況（経営・人材育成）などの成果を読み取ることは、素人には到底無理なことで、役に立つ報告ができず、申し訳ありません。

恵那市の小規模教育検討事項

報 告 書

平成21年12月

小規模教育検討委員会

1 はじめに

(1) 恵那市小規模教育検討の趣旨及び目的

小規模化する本市の学校と教育が今後あるべき姿を検討し、学校の小規模化によって生じる教育上・学校運営上の諸問題を解消し21世紀の新しい教育に対応できる教育環境の総合的な整備を図ることを目的とする。

学校関係者・地域住民の合意形成を図りながら、教育行政面を考慮しつつ、公立学校の教育の充実、教育環境の公平性の二つの観点に沿って学校適正配置の必要性を検討する。

(2) 「小規模教育検討委員会」への検討事項

第1回「小規模教育検討委員会」において、教育委員会より、以下の3点についての検討が依頼された。
(「小規模教育検討委員会」検討依頼より抜粋)

小規模教育検討委員会 様

恵那市の小規模教育検討事項について

今日の教育は、生きる力（思考力、判断力、行動力、健全な心身）の学力観にのっとって教育しているところであるが、社会性の欠如や学力低下の問題が議論されている。このことは、全国的な傾向のみでなく恵那市においても重要な教育課題である。

今後、21世紀を生きる恵那市の子どもにとってどのような教育環境が必要とされるのか。また、生涯学習の基礎を培う義務教育は、どうあるべきか恵那市の実態を踏まえて、広く議論が必要とされている。中でも、近年の少子化に伴い恵那市でも児童・生徒数は減少を続けている。それに伴い、市内全体に小規模化が進み複式を有する小学校も複数出てきている。また、完全複式の小学校も増加してきている。今後の推計では、児童・生徒数の減少は進み続ける。そこでは、「児童・生徒にとって今まで通りの充実（教育の充実、教育環境の公平性）した学校教育を受けることができるかどうか。」が懸念される状況も予想される。

とりわけ、この少子化の流れが生み出す教育環境の変化が前述した社会性の欠如や学力低下の問題を顕著化させる要因であることも少なからず考えられる。

以上の理由から、以下の3点を検討委員会で検討をし、今後の恵那市の教育環境のあるべき姿を検討していただくよう提案するものである。

- 1 21世紀を生きる恵那市の子どもたちの教育環境について
現状の把握 適正規模のあり方 そこから生まれる課題の明確化
- 2 恵那市全体を考えた中学校の適正規模のあり方について
適正規模からみた恵那市の中学校のあるべき具体的姿

3 将来の恵那市の小学校教育のあり方について

将来の恵那市の小学校の具体的方向性

小規模教育検討委員会で広く議論進められ、多方面からの意見を集約する中で、上記の3点についてあるべき姿の方向の検討を願うものである。

平成20年10月28日

恵那市教育委員会 (公印略)

2 「小規模教育検討委員会」による検討経過

これまでに、下記のように10回の「小規模教育検討委員会」を開催し、依頼された3つの検討事項について審議を進めてきた。その内2回は、飯地小学校及び串原中学校（串原小学校）を訪問し、本市の小学校及び中学校における『へき地小規模校』の現状視察を行った。

また、委員からの強い要望から外部講師を招き、審議の方向性を示唆していただいた。

以下は、これまでの委員会の概要である。

- ・第1回委員会 平成20年10月28日（火） 会議棟大会議室
委嘱書交付、組織づくり、検討事項伝達、委員会の進め方 等
- ・第2回委員会 平成20年11月25日（火） 会議棟大会議室
恵那市の現状説明、検討事項1について審議
- ・第3回委員会 平成21年 1月15日（木） 岩村振興事務所大会議室
検討事項1について審議
- ・第4回委員会 平成21年 2月24日（火） 飯地小学校
現地視察 検討事項3について審議
- ・第5回委員会 平成21年 5月13日（水） 岩村振興事務所大会議室
組織再編とこれまでの審議経過確認 検討事項3について審議 アンケート依頼
- ・第6回委員会 平成21年 6月22日（月） 岩村振興事務所大会議室
小栗章正（恵那市元教育長）様の講話（検討事項1～3について審議方向性の示唆）
- ・第7回委員会 平成21年 7月14日（火） 串原中学校（串原小学校）
現地視察 検討事項2について審議
- ・第8回委員会 平成21年 9月29日（火） 岩村振興事務所大会議室
検討事項2について審議 「小規模教育検討委員会」報告書（案）の提示
- ・第9回委員会 平成21年10月28日（水） 岩村振興事務所大会議室
「小規模教育検討委員会」報告書（案）の検討
- ・第10回委員会 平成21年11月17日（火） 岩村振興事務所中会議室
「小規模教育検討委員会」報告書（修正案）の検討

【検討委員会議事録は、別添資料を参照】

3 「小規模教育検討委員会」での検討報告

《検討事項1》について

2 1世紀を生きる恵那市の子どもたちの教育環境について

(1) 現状把握 (2) 適正規模のあり方 (3) そこから生まれる課題

恵那市の学校教育の使命として「ふるさと恵那」への誇りと愛着を醸成し、恵那市の次代を担う青少年の育成を考えている。そのためには、今日の教育の目標ともなっている「生きる力」を子どもたちに着実に身につけさせていくことが必要である。このことは、「知・徳・体」の調和のとれた人間性豊かな子どもの育成、すなわち「学力や仲間に関わる力」を兼ね備えた子どもを育成していくことである。

学校教育の場においては、一人ひとりの個性を伸ばし、学ぶ意欲や興味関心の喚起、学び方の育成など、生涯学習の基礎となる学力の定着を図ることが大切である。また、仲間と関わることを通して、豊かな社会性を育むことも大切である。

これらを受けて、恵那市学校教育の方針を受けた学校づくりに努めなければならない。

【恵那市学校教育の方針】

- ほほえみの生まれる学校を目指した規律と対話のある教育
- 一人一人の個性を生かし、確かな学力のつく授業
- 地域に根ざし、地域を生かした特色ある学校

以上の恵那市の学校教育の方針を実現するためには、児童生徒の豊かな人間性や自ら考える力などの確かな学力の育成を図るための指導・支援のあり方や授業改善はもとより、教育環境面の充実にも目を向ける必要がある。特に、今後の少子化に伴って生じる、21世紀を生きる恵那市の子どもたちの教育環境についての対策を講じることが重要な教育課題であると捉えた。

(1) 現状把握

このところの少子化の流れは、就学児童の減少や学級数の減少を生み、それに伴い教職員数の減少をも生み出している。特に、恵那市周辺部での小学校では複式学級が増加し、中学校では各教科の専門教員が不足するという事態が増えてきている。

そのために、豊かな社会性や人間関係を育むための学習集団を十分に組織することができない、専門性に裏付けられた授業が受けられないことなどが心配される。このことは、全国的に危惧されている、子どもたちの社会性の欠如や学力の低下問題にも影響を及ぼすものでもある。

恵那市の人口統計から明らかなように、この少子化の流れは、今後も長い将来にわたって続いていくことが予想されている。

(別紙資料参照【恵那市の児童生徒数の推移表】)

この状況の中で、「学力や仲間に関わる力」を兼ね備えた子どもを育むために、早急に教育環境面での対応をしていく必要がある。中でも、小学校・中学校における「学校適正規模」の検討は、最重要の教育課題である。

(2) 適正規模のあり方

学校規模については、法制面から以下の規定がある。

『小学校の学級数は、十二学級以上十八学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りでない。
(中学校についてもこの規則を準用)』

学校教育法施行規則第41条

すなわち、小学校では、各学年2学級～3学級、中学校では、各学年4学級～6学級で構成される規模が「標準の学校規模」となる。法制面からいえば、この「標準の学校規模」を下回る学校は、小規模校として位置づけられる。したがって、恵那市内にある小学校・中学校23校の多くは、小規模校に属することとなる。

恵那市内の小規模校においては、教職員、保護者、地域が力を合わせて、小規模校のデメリットを承知しつつ、小規模校でも乗り切れる学習方法と学習内容の創意工夫を見出して、教育成果を上げてきているのが実情である。その一方で、教育上の諸問題に加えて、児童生徒の教育活動維持のために保護者負担が大きく押し掛かっている面もある。

以下、恵那市の多くの学校が属する小規模校（学年単学級で、学級人数の少ない学校をイメージ）における、主なメリットとデメリットを以下のように捉えた。

【小規模校（学年単学級で学級人数の少ない学校）で考えられるメリットとデメリット】

	[小規模校のメリット]	[小規模校のデメリット]
全体的な傾向	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し練習する学習の場合など児童生徒一人ひとりに直接的な指導を行いやすい。縦割りグループの活動や異なった学年との交流が図りやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の多様な見方考え方や覇気や逞しさが育ちにくく、知的刺激が少ない。
	<ul style="list-style-type: none"> ・運動場や特別教室など、学校施設が余裕を持って使用できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動開設などに限りがあり、多種多様な興味や関心に応じにくい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・比較的自分のペースで学習活動に取り組める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団で行う学習活動などについて制約がしやすい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会などの学校行事において、出場や発表の機会が多い。 ・小回りが効くため、他校や地域との交流等、機動性に富んだ教育活動ができる。 ・教師が児童生徒一人ひとりの顔色を見て健康状態を配慮しやすい。 ・全教職員が全校の児童生徒名を覚えやすいため、きめ細やかな指導ができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・運動会などの学校行事において全体的な盛り上がりには欠け、高学年に大きな負担がかかる。 ・学級対抗が無いなど、児童生徒が切磋琢磨する機会に恵まれにくい。 ・教員が単独で教材研究や指導方法について取り組む状況になりやすい。

	<ul style="list-style-type: none"> ・教師間で指導方針などについて、共通理解や共通行動を図りやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人の教職員が多くの校務分掌を担当することになり、時間的にも、児童生徒へのかかわりの面にも支障をきたす恐れがある。
施設の維持	<ul style="list-style-type: none"> ・校庭などでは一人の利用面積が広くなり、有効活用、突発的な事故が少ない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校施設の清掃や維持管理が行き届かなくなる。見届けられない空間ができる。
保護者 P T A	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の場面も多くなり、一人ひとりの参加意識が高くなる。 ・必然的に、地域や保護者の支援を依頼する場面が多いため、地域ぐるみの教育が展開されている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・活動に伴う保護者の役割分担や、一人あたりの経費負担が大きくなる。 ・地域行事や地域活動に要請されやすい。
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の見届けがよくでき、本読みや書き取りはよくできる。 ・授業での発表の機会が多くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な人の考えを取り入れて「私はこう考える」という考えを深める学習ができていく。
算数 数学	<ul style="list-style-type: none"> ・九九の練習など繰り返す学習では、個々の実態に即した指導ができ成果が期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・文章題では共同追究が重要だが、多様な考え方が出にくい。算数（数学）の得意な児童生徒に引っ張られる傾向がある。
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・特別教室や実験器具が余裕を持って活用でき、一人ひとりが直接経験しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・実験を行う班が少ないため実験のデータの予想や比較ができない。実験結果を元に共同追究することが難しい。
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・教材教具や視聴覚資料など余裕を持って活用できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習班が少なく共同学習をしたり、他の班のとの発表比較する活動が少なくなる。
図工 美術	<ul style="list-style-type: none"> ・個人作業や作品の制作は比較的集中してできる。指導がこまめにできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仲間の作品を鑑賞することで、多様な表現があることに気づく機会が少ない。
技術 家庭	<ul style="list-style-type: none"> ・教材に余裕があるため、時間に余裕をもった学習展開ができる。 ・教師の指導支援が行き届きやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ活動やグループ間の比較などができにくいいため、多様な考え方や作品が生まれにくい。
保健 体育	<ul style="list-style-type: none"> ・個々への指導が行き届き、安全面が徹底しやすい。 ・個別指導が十分でき、個の実態に即した指導支援がしやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団種目はミニゲームとなり変則ルールで行ったり、男女共修で行うこととなる。 ・常に限られたチーム編成になり、集団性発達を学ぶ機会が少ない。
音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・アンサンブル(少人数合奏) が効果的に練習できる。楽器、教材などが余裕を持って活用できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・多人数の合奏や合唱を聴いて音のバランスや音色を比較することができにくい。 ・迫力のあるダイナミックな合唱ができていく。お互いに聴きあう活動ができない。
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・スクランブル活動など、個別に教師や A L T との会話の機会が多くできる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・限られた人数内での交流になり、交流内容の多様性に限りがある。

標準の学校規模が学級数で表されていることや教職員の設置が学級数によって示されていることから、学級数を中心にした適正規模についての検討を進め、次の2点から整理をした。

《学習集団の充実》

学校の存在意義の最も大きなこととして、集団学習による教育効果がある。すなわち、多くの個性がぶつかり合い切磋琢磨しながら、多面的なものの見方や考え方を交流しながら自己を高めていく場が学校である。また、学校生活内で生じる様々な問題に対して、お互い力を合わせて問題解決をする過程を経ることで仲間の素晴らしさを感じ、豊かな社会性や望ましい人間関係が育まれていくのが学校である。児童生徒は、生活の大半を学校で過ごしており、そのため学校における望ましい人間関係の醸成は大きな意味を持っている。

新年度に行われるクラス替えは、固定しがちな人間関係に変化を与え、個人の気持ちや学習環境の切り替えのチャンスにもなる。一方、小規模な学習集団には、物理的に実施したくてもできない学習活動が多くある。体育授業における集団種目や音楽授業での合唱など、活気や迫力は大集団になるほど大きく、相互に関わりあう中で質的に高まっていくものである。また、学校行事におけるプログラム量が豊富なほど、部活動の種類が多いほど、一人ひとりの個性や特性を伸ばすチャンスともなる。一定規模を満たしている学習集団であれば、創意工夫によって小規模集団の持つメリットに近づくことはできるが、逆の場合には限界がある。

したがって、一定規模を満たした学習集団を確保し学習環境を整備することが、子どもの学ぶ権利を保障すると共に、より質の高い学習を創り上げることにもなる。

以上の点を考慮すると、少なくとも学年で複数学級が編成できる学校規模が条件として考えられる。

《教育指導・学校運営の充実》

学校では一人ひとりの個性に応じて学習課題や学習方法を設定したり、複数の教職員によるチームティーチングや少人数指導により教育効果をあげたりする取り組み等がなされてきている。子どもの自己決定力を養い、興味関心に応じた学習を保障する上で、中学校での選択教科（新学習指導要領では縮小廃止）や部活動は重要な位置を占めている。しかしながら、小規模校では指導をする教職員が少なく、十分な選択枠が準備できないという大きな課題が生じている。

教職員の学校配置は学級数に応じて行われるが、中学校においては、1学年4学級以下になると、教科によっては、免許外教員あるいは非常勤講師で対応することになる。免許外教員が授業を担当することにも課題はあるが、更に非常勤講師の場合には時間的制約があり、時間割編成にも大きな影響を及ぼす。また、放課後などを活用した個別指導や校務分掌を担当することも難しくなり、教育活動に十分関われないという問題も派生してくる。

大規模校における同一学年、同一教科に複数の教職員がいることは、日々の教育実践や研究実践を進める上で発想がより豊かになり、相互研鑽が得られるなど、教職員の専門性や資質向上を図る上で大きな教育効果が期待できる。その一方で、小規模校では一人の教師がその学校の教科指導を支えると共に、一人で多く校務分掌を兼務することとなる。初任教師または若い教職員が一人で校務分掌を担当することにもなる。若い教職員には幅広い経験を積ませ成長を図るという前向きな考え方もあるが、先行き不透明な仕事に取り組む本人への精神的負担感は大きい。経験豊富な教職員と共に歩みながら、仕事を学んでいく過程は若い教職員を育てる上で、重要な方途でもある。

したがって、学校における学習指導及び学校運営の充実に向けた最低限の教職員数の確保が不可欠であるとする。

以上の点を考慮しつつ、恵那市の「小中学校の適正規模条件」を以下のように捉えた。

恵那市の「小中学校の適正規模条件」の基本

○小中学校ともに、1学年で複数の学級が編成される規模が望ましい

○中学校では、各教科担任が満たされる規模が望ましい

恵那市の適正規模としては上記の条件が望ましいが、地理的条件や地域性を考えた場合、その許容範囲として、小学校は学年単学級規模、中学校は学年複数学級規模を考える。

今後、小学校において完全複式学級の学校規模が予想された場合、中学校では全学年で単学級の学校規模が予想された場合、中でも小学校、中学校ともに全校児童生徒数が50名以下になることが予想される場合には、保護者・地域・学校・行政の4者が協力し合って協議会を立ち上げ、統合問題を含めた具体的な動きづくりをする必要がある。

(3) そこから生まれる課題

「学校の適正規模化」への取り組みを進めていくと、「学校統合問題」に直面する。

この問題の方向性としては、“児童生徒数と教職員数が少なくなる”ことをどのように捉えるかである。前述したように「学校の適正規模＝標準の学校規模」は法的に決められており、今後の学校教育のあり方を考えた時、適正規模に満たない学校では、次のような選択が求められる。

- ① 教育方法や教育内容の創意工夫をしながら、小規模状況を乗り切る
- ② ①ができない状況となれば、近隣校と統合をして学校規模を大きくする

いずれにせよ、恵那市における「学校の適正規模化」の問題は、「学校統合問題」を前提に、今後に向けて、どこかで明確にしていかななくてはならない喫緊の課題である。

そこで、本委員会では、対象地域における「学校の適正規模化」を推進する上で「学校統合問題」が協議されることになった場合には、以下の点を十分考慮していくことを強く希望する。

- 学校統合問題は、保護者・学校・地域・行政の4者の合意を得ながら慎重な手続きの下で、大人の誇りや地域の閉鎖意識だけに拘るのではなく、そこで学習する子どもたちのことを第一に考えた議論となるように留意すること。
- 学校統合にあたっては、各学校の創立以来の学校文化や伝統（校風）を継承しつつ、新たな学校づくりの視点を持ち、子どもたちの母校への愛着と誇りを高めるように配慮すること。
- 教職員は学校統合問題を前向きに捉え、新たな特色ある学校づくりに向け、教育課程の編成、学校行事の再編を行うとともに、教職員自身の資質向上に努めること。
- 学校統合による子どもたちの通学時間や通学方法の変更について、行政側は保護者の理解が得られるように適切に対処すること。
- 学校跡地活用については、『恵那市の総合計画』に基づき、地域コミュニティの拠点として有効活用できるように総合的に判断すること。

恵那市全体を考えた中学校の適正規模のあり方について

・適正規模からみた恵那市の中学校のあるべき具体的姿

本委員会での結論として、「中学校については、各教科担任が満たされる学校規模にすることが望ましい」とした。前述した法制面からいえば、中学校では、各学年4学級～6学級で構成される規模が「標準の学校規模」となる。この学校規模となれば、各教科担任が満たされる学校となる。

今後に向けては、恵那市の「小中学校の適正規模条件」の基本に照らして、「学校の適正規模化」を推進していく必要がある。

つまり、「学校統合」を視野に入れた地域協議を早期に進めていくことが望ましいと判断した。

◇旧恵南地域の5中学校（岩邑中、山岡中、明智中、上矢作中、串原中）について

以下は、今後10年間の生徒数、それに伴う通常の学級数の変遷予想である。

(※特別支援学級は加配のため、平成25年度予想、平成30年度予想のため明記せず)

平成20年度						平成25年度予想						平成30年度予想					
岩邑中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒数	54	46	55	2	157	生徒数	47	58	51	4	160	生徒数	54	33	38		125
学級数	2	2	2	1	7	学級数	2	2	2		6	学級数	2	1	1		4
山岡中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒数	60	50	42	3	155	生徒数	36	52	40	5	133	生徒数	27	31	31		89
学級数	2	2	2	2	8	学級数	1	2	1		4	学級数	1	1	1		3
明智中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒数	56	56	65	2	179	生徒数	56	53	47	3	159	生徒数	35	44	34		113
学級数	2	2	2	1	7	学級数	2	2	2		6	学級数	1	2	1		4
串原中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒数	8	5	9		22	生徒数	3	6	7		16	生徒数	6	4	5		15
学級数	1	1	1		3	学級数	1	1	1		3	学級数	1	1	1		3
上矢作中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒数	17	23	23		63	生徒数	12	14	20	1	47	生徒数	14	12	15		41
学級数	1	1	1		3	学級数	1	1	1		3	学級数	1	1	1		3

この旧恵南地域にある5つの中学校については、前掲表のように、いずれの学校も各教科担任が満たされる学校規模ではなくなる。合わせて、生徒減（平成30年度予想）から多くの学校が学年単学級規模となっていく。そのため、そこに生活する生徒たちにより充実した教育環境を提供するためには、学校規模を大きくすることが望ましい。ただし、学校規模を大きくする（学校統合を推進する）動きの中で、生徒たちの通学する上での精神的な負担感、保護者の経済的な負担感、地域の願いを配慮していく必要がある。

本委員会では、今後の恵那市財政状況も含めて総合的に判断するに、以下のように旧恵南地域の「学校の適正規模化」を推進していくことが望ましいと考えた。

○今後の恵南地域5中学校の方向性については、5校を統合し、新しいコンセプトを持った統合中学校1校を新設する。

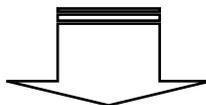
地域の住民感情、恵那市の財政状況等の現状認識からすれば、この案を推進していくことは多くの困難な課題が予想される。しかし、この地域の将来を見据え、今後の少子化の流れに左右されない十分な学校規模のある1中学校にすることこそが、ここで生活する生徒たちにより充実した教育環境を提供することとなる。この統合校は、平成30年度予想の恵那西中学校と同等の学校規模となり、教職員数も確保でき、生徒たちは専門教科担任による質の高い授業を受けることが可能となる。

なお、新設される統合校については、恵那北中学校での範にもあるように、地域や時代のニーズに応える新しいコンセプトを持った、生徒や保護者に夢を与える学校づくりを望みたい。

参考までに、旧恵南地域の5中学校が1校に統合した場合、以下の学校規模となる。

【平成30年度学校規模の予想】

《旧恵南地域5校の学校規模》	
・岩邑中学校は、	生徒数125名、学級数4学級、教諭数7名（校長・教頭を除く）
・山岡中学校は、	生徒数89名、学級数3学級、教諭数6名（校長・教頭を除く）
・明智中学校は、	生徒数113名、学級数4学級、教諭数7名（校長・教頭を除く）
・串原中学校は、	生徒数15名、学級数3学級、教諭数6名（校長・教頭を除く）
・上矢作中学校は、	生徒数41名、学級数3学級、教諭数6名（校長・教頭を除く）



《旧恵南地域5校が統合した学校規模》	
・統合中学校	生徒数383名、学級数12学級、教諭数18名（校長・教頭を除く）

様々な要因から本委員会が提案する方向性が困難と予想された場合には、生徒たちの社会性を育み学習環境を充実させるという視点から、全校生徒が50名以下となる学校への早期対応が求められる。

具体的には、平成30年度予想としての串原中学校（17名）、上矢作中学校（39名）への対応である。1つの対応案ではあるが、上矢作中学校と岩邑中学校、串原中学校と明智中学校とを統合させ、1学年複数学級となる学校規模とすることも臨時的な措置として検討する必要がある。

【平成30年度学校規模予想】

- ・岩邑／上矢作中学校は、生徒数166名、学級数6学級、教諭数9名（校長・教頭を除く）
- ・明智／串原中学校は、生徒数128名、学級数6学級、教諭数9名（校長・教頭を除く）
- ・山岡中学校は、生徒数89名、学級数3学級、教諭数6名（校長・教頭を除く）

◇旧恵那地域の3中学校（恵那西中、恵那東中、恵那北中）について

以下は、今後10年間の生徒数と、それに伴う通常の学級数の変遷予想である。

（※特別支援学級は加配のため、平成25年度予想、平成30年度予想のため明記せず）

平成20年度						平成25年度予想						平成30年度予想					
恵那西中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒	145	170	152	2	469	生徒	131	156	137	5	429	生徒	114	126	130		370
学級	4	5	4	2	15	学級	4	4	4		12	学級	3	4	4		11
恵那東中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒	154	162	121	4	441	生徒	162	154	145	9	470	生徒	144	156	177		477
学級	4	5	4	2	15	学級	5	4	4		13	学級	4	4	5		13
恵那北中学校																	
	1	2	3	特	全		1	2	3	特	全		1	2	3	特	全
生徒	31	44	36	1	112	生徒	26	35	28		89	生徒	24	28	32		84
学級	1	2	1	1	5	学級	1	1	1		3	学級	1	1	1		3

◇恵那西中学校、恵那東中学校について

【平成30年度学校規模予想】

- ・恵那西中学校は、生徒数391名、学級数11学級、教諭数17名（校長・教頭を除く）
- ・恵那東中学校は、生徒数480名、学級数13学級、教諭数19名（校長・教頭を除く）

恵那西、恵那東中学校については、前述の恵那市の「小中学校の適正規模条件」の基本を満たしている。ただ、時代の流れ、人の流れと共に、やや煩雑となってきた恵那市街地の学校区の見直しを図る必要がある。

◇恵那北中学校について

【平成30年度学校規模予想】

- ・恵那北中学校は、生徒数74名、学級数3学級、教諭数6名（校長・教頭を除く）

これは、平成30年度予想の山岡中学校と同等の学校規模であり、前述の恵那市の「小中学校の適正規模条件」の基本を満たしていない。そのため、「学校の適正規模化」を推進していく対象校ともなる。ただ、この恵那北中学校は、平成9年4月に統合（飯地中学校・中野方中学校・笠置中学校の3校による統合）し、新しいコンセプトを持った地域に根づいた学校づくりをしてきた経緯もあり、当面は現況を維持していく方向が望ましい。

ワーキング内容

テーマ「地域や時代のニーズに応える学校づくり」
～小規模教育検討委員会の検討結果を踏まえて～
「子どもたちにとって、良い教育環境を考える」

- 1, 現状のままの中学校のあり方でよいか。
- 2, 改善するとしたら、どのような方法・手段があるか。
- 3, 改善する場合の、課題は何か。
- 4, その他